

---

# ロックマンゼロ 紅き英雄の未来

颯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロックマンゼロ 紅き英雄の未来

### 【Nコード】

N8047X

### 【作者名】

颯

### 【あらすじ】

みなさん!!もう1つの作品の第1章が終わりを告げました・・・約束しましたとおり・・・ここにロックマンゼロを投稿します。思い返せば7月・・・この作品を書きたいがために登録しました。精一杯がんばりますので応援宜しくお願いします。それではストーリーの方へ・・・

ラグナロクを破壊したゼロ・・・だが3年がたった今でも彼は戻ってこない・・・燃えるような真紅のボディに身を包み、揺れる

黄金の長髪、そして白い金属製の柄と三角形を象った光の刃で構成された一本の剣を振るっていた彼は・・・私の前には現れてくれないのだろうか・・・

## プロローグ

ラグナロクを破壊してはや3年がたった・・・

だが彼はいない・・・

一緒に戦った・・・ゼロがいない・・・

燃えるような真紅のボディに身を包み

揺れる黄金の長髪

そして白い金属製の柄と三角形を象った光の刃で構成された一本の  
剣を振るっていた彼は・・・

もう・・・私の前には現れてくれないのだろうか・・・

ゼロ・・・私は・・・あなたに会いたいよ・・・

・ 永遠なんていないから・・・もう一度・・・あなたに会いたい・・・

## プロローグ（後書き）

ぐっだぐだですね・・・次回からまとめて行きますので宜しく願  
いします。

## 1stミッション：帰還

シエルside

ゼロがラグナロクで戦って早くも3年が過ぎていた。

そして、人間とレプリロイドが手を取り合える時代になろうとしていた。

しかしその一方で、ゼロは帰ってこなかった。

レジスタンスの面々は、ゼロの搜索とバイル軍の残党軍との戦闘を各地で行っていた。

ネージュ達エリアゼロの住民も懸命な搜索を行っているが、今だゼロは見つかっていない。

見つかったのは、ゼロのヘルメットだけだった。

これをもって、ほぼゼロの搜索は打ち切った。

レジスタンスは、各地で戦闘で被害になった人々を助ける活動を開始した。

1つはまだ生きている多くの人を助けること。

そしてもう1つは、生きているかもしれないゼロの情報を集める

ため――

三人称 side

サイバー空間・・・

ゼロ「（・・・ここは・・・どこだ？）」

ふと目覚める紅き英雄・・・だがそこは自分の知っている場所ではない・・・

??「やあゼロ・・・久しぶりだね・・・」

ゼロ「エックス？」

そこには100年前一緒に戦っていた蒼き英雄・・・エックスがいた・・・

エックス「ここはサイバー空間だよ・・・ねえゼロ・・・君はもう戦わなくていいんだよ？」

突然のエックスの言葉に傷口を塩で塗られたような顔をするゼロ・

エックス「君は十分戦った・・・バイルの脅威もさり、人とレプリロイドが手を取り合って生きていける世界になった・・・もう、僕たちは必要ないんだよ？」

ゼロがサイバー空間に閉じ込められて3年間でシエルたちレジスタンはバイル軍の残党を倒してくれていつている・・・

エックス「でも、ゼロ・・・まだバイルの脅威は去っていない。」

ゼロ「どういことだ！？俺はラグナロクを破壊した・・・」

エックスの胸倉を掴もうとしたが体が動かない・・・動かせるのは口だけだ・・・

エックス「原因は分からない・・・でも、ゼロが戦っていつている間にラグナロクのデータを調べただけど、まったく同じ反応・・・いや、それ以上の反応を確認したんだ。そこからイレギュラーが溢れ出てきているんだ。」

ゼロ「・・・だが、今の俺は・・・」

エックス「だから僕が来た・・・ゼロ・・・僕はもうこの世界に長くいる事だっでできない・・・最後の力をもって君をみんなのところに転送する・・・いいね？」

ゼロ「待て・・・俺はどうしたらいいんだ？」

エックス「バイルは自らの意思を金属に変えている、それを破壊してくれ。また君には戦ってもらうけど・・・ごめんね。ゼロ・・・」



」

そういつてエックスは消えた。

ゼロ「……まったく仕方の無い奴だ……。前にも言っただろう？」

ゼロの体が光に包まれる……

ゼロ「目の前に敵が現れたのなら……。叩き切るまでだ……」

そしてゼロも、サイバー空間から姿を消した……

トレーラーで移動しながらのものは限界があつた……。シエルたちは一度エリアゼロに戻った……。が、

コルボー「シエルさん!!」

シエル「どうしたの？」

ラグナロクを破壊して3年……。こんなコルボーは今まで見たことがなかった。

コルボー「バイル軍の残党がエリアゼロに接近している模様!!  
数は400!!うち2体はミュートスレプリロイドです!!」

シエル「なんですって？」

ミュートスレプリロイドとは、簡単に言うと戦闘能力がずば抜けて高い動物の形をしたレプリロイドだ。

それが2体も・・・

シエル「急いで防衛線を張って!! エリアゼロを守りましょう!!」

コルボー「はい!!」

後ろに広大な自然・・・いや今この世界唯一の自然の前に構えているおよそ100体のレプリロイド・・・

そして前には無機質な音を立てて歩いてくる400のメカニロイド・・・勝負は火を見るより明らかだ・・・

コルボー「来たぞ、撃てー!!」

現リーダーコルボーの合図で、バイル軍のレプリロイドに一斉射撃を放つ。

けれどさすがバイル軍、一体一体の力がレジスタンスに勝っていた。

コルボー「くっ……」

ここまでの大群相手……レジスタンスは久しぶりに戦う。ラゲナロクの戦いのあと、今まで戦ったのは少数の軍勢……

けれど今回は違った……

「隊長、このままではやばいです!」

突如仲間の悲痛な叫びが聞こえた。

コルボー「踏ん張れ! こっちは守らなきゃいけないんだ!」

そういうコルボーだったが、『(ゼロがいれば……)』そう思ってしまった。

隙を作ったコルボーに敵のメカニロイドがコルボーに迫った。

コルボー「(しまった!)」

コルボーは眼を瞑った。けれど、いくら待っても痛みはなかった。

眼を開けてみると、そこには自分を襲ったレプリロイドが破壊されているではないか。

この窮地に馳せ参じてくれるのは、コルボーは1人しか思いつかない……

コルボー「ぜ、ゼロ――」

「なに言ってるんですか、早く指示を出してください!」

隊員がそう言った。どうやらこの隊員が自分を助けてくれたらしい。

コルボーは短く溜め息をつき、指示をだす。

ゼロは死んだのだ。それを自分が言ったのだ。今更生きていると錯覚するなんて馬鹿げている。

戦況はあちらが優勢だ……

そんな中、2体のミュートスレプリロイドが現れた……

1体目は虎のような形をしており、2体目は蛇のような形をしている。

蛇と虎はやすやすと防衛線を突破していく。

その先には……

コルボー「シエルさん!!」

シエルがいた・・・だがもう遅い。2体のミュートスレプリロイドはシエルへと大きな口を開け噛み砕こうとした・・・

シエル「キャアアアアアアアアア!!」

シエルは恐怖のあまり視線を外す・・・しかし一向に痛みはこない・・・

シエルは再び視線を戻す。するとそこには・・・ミュートスレプリロイドを受け止めている英雄がいた。

シエル「ゼ・・・ゼロ?・・・」

ゼロ「シエル・・・遅くなったな・・・すまない・・・」

「  
そういいゼロは今まで見せた事の無いだろう笑顔をシエルへと向けた。

そんなゼロを見て、シエルは泣き出した・・・

ゼロ「泣くのは後だ・・・」

ゼロは両腕にもっていたリコイルロッドをチャージしそれを相手へと捻り込んだ。

その2体は吹き飛んだ。

ゼロはリコイルロッドを上空めがけて突いた。

リコイルロッドからたくさんの火の玉が降ってきた……リコイルロッドのEXスキル……ソウルランチャーだ……

ゼロはリコイルロッドをしまい、Zセイバーを取り出し、チャージを開始した。

ゼロ「ハアアア!!」

チャージが終わったZセイバーを虎にぶつけた。

虎? 「グワアアア!!」

ゼロ「……ほう……喋れるのか……」

蛇? 「バイル様の仇!!!」

そういつつゼロに体当たりを仕掛けてきた。が……

ゼロはソレをZセイバーで受け止める。

アクネス「我が名はアクネス。元バイル様の部下だったお前を倒す!!!」

ゼロは左手でシールドをチャージし投げつける。

ゼロ「悪いが……お前に構っている暇は無い……」

シールドはゼロの周りを回転する。そしてアクネスを切り刻む……

・  
シールドのEXスキル、サーキュラシールドだ。

アクネス「グワアアアア!!」

悲鳴をあげアクネス・・・蛇は爆発と共に散った。

虎? 「よくも!!」

ゼロ「貴様には名乗る暇さえも与えん。」

ゼロはシールドをしまい、Zセイバーを取り出した。

ダッシュしながら斬りつけ、

ゼロ「昇焰牙!!」

斜め上に上昇しつつ炎を纏ったセイバーで斬りつける。

そして背後に回りこみ2回斬りつける。

ゼロ「武雷突!!」

ダッシュしながら雷を纏ったZセイバーで突く

ゼロ「氷月刃!!」

地形に沿って進む氷の刃を飛ばす。

ゼロ「ハアアアアア!!!!」

そして最後にチャージしたZセイバーを叩きつける。

そして虎は爆ぜた……

その戦闘の一部始終を見ていたコルボーが叫ぶ……

コルボー「……ゼロさんが……ゼロさんが帰ってきたぞ……!!!!」

次の瞬間にみんなの表情が明るくなった……

戦況は先ほどとは打って変わった。

2体のミュートスレプリロイドを破壊したゼロの加入により、バイル軍の残党は1時間と持たなかった……

それから残党軍は、レジスタンスとゼロの活躍により壊滅した。レジスタンスの面々は、ゼロの帰還を喜びながら、トラクターに戻っていった。



コルボー「みんな、3年間も帰ってこなくて心配したんですよ？」

ゼロ「3年？」

そう・・・ゼロが消えて3年が経過してた・・・だがそんなこと彼は知らなかった・・・

ゼロ「まさか・・・」

おそらくはエックスだろう・・・あいつが俺を見つけて転送するまでにそれほどまでの時間がかかったのだろう。

シエル「ゼロ！」

トラクターからシエルが飛び出してきた。眼にはまだ涙を浮かべて。

シエルはゼロを抱きしめた。ゼロの胸に顔を押し込んで。

ゼロは少し驚いている。その間にほかの隊員はトラクターに戻っていった。

シエル「ゼロ、戻ってきてくれてありがとう」

シエルは、ゼロに顔を向けてそう言った。

ゼロ「・・・すまない。」

ゼロにはそれしか言えなかった。

シエル「ゼロ——もう無理しないで？」

ゼロは一瞬言葉の意味が分からなかった。

シエル「もう、ゼロと離れたくない……だから、もう無理しないで？」

涙を浮かべて言われるゼロ。彼は何も言えない。自分の力不足でシエルを悲しませてしまったのは事実だ。

シエル「……少しでいいから……私の傍にいて？」

シエルの願い。それがゼロが今、シエルに叶えられる願い。

ゼロ「……ああ」

ゼロはシエルをそっと抱きしめる。

シエル「ありがとう……ゼロ」

## **1stミッション；帰還（後書き）**

どうですか？みなさん。初のロックマンです。

この作品は、ラグナロク戦後から ゼロがライブメタルになるまでの経緯を書いていきます。

これからも宜しくお願いします。

## キャラクター紹介 用語まとめ

ゼロ

伝説のレプリロイド、ゼット（Z）セイバーという光り輝く武器を持つ。伝説の英雄エックスとは誰よりも強い絆で結ばれた親友同士である。妖精戦争後、100年にわたって封印されていた。シエルによって目覚めた後はレジスタンスに協力することとなる。「破壊神」「英雄」など、劇中でのゼロに対する認識、呼称は様々。当人はそれに縛られることなく最後まで自分が信じる者のために戦い続けた。

シエル

ネオ・アルカディアの優秀な科学者を産出する計画に基づき、遺伝子操作によって産まれた人間の少女。年齢18歳。かつてはネオ・アルカディアに所属していたが、現在は処分を免れたレプリロイド達と共に生活し、レジスタンス活動を行っている。聡明で、多くのレプリロイド達から慕われている。レプリロイドやサイバーエルフの研究を主としているが、エネルギー不足を解消する為の新システム「システム・シエル（System a Cie l）」を開発したり、若いながらもレジスタンスの司令官を務めるなど、その才能は多岐にわたる。

レプリロイド

人間的思考回路を持つロボットの総称で、自ら考え物事进行处理する事が出来る。これと区別され、命令されたプログラム通りに動くロボットはメカニロイドと呼ぶ。なお人型のメカニロイドや、獣型

のレプリロイドも存在するため「人型レプリロイド」というわけではない。ただし、「涙を流す」という行為はできない。

イレギュラー

電子頭脳や思考回路等に欠陥があり、他者を傷つけるロボットの総称。

つまりは、この世界における犯罪者。

## 2ndミッション；脅威

A

レジスタンス トレーラー内

シエル side

ゼロが戻って3ヶ月が過ぎ、レジスタンスのメンバーも落ち着きを取り戻してきたの・・・そんな中、私たちはある事に気がついた・・・

ゼロ「イレギュラーが何らかの理由で発生している？」

シエル「ええ・・・今までイレギュラーを倒してきているけど・・・一向に数が減らないの・・・」

ここで1つの仮説がたった・・・おそらく・・・

ゼロ「・・・ラグナロク・・・いや、バイルの残骸か・・・

」

おそらくはそうなのだろう・・・いまだにバイルの反応は消えていないし、むしろ多くなっていくくらいだ・・・

シエル「ごめんなさい・・・ゼロ・・・あなたにはまた戦う事になると思うけど・・・その時は・・・」

ゼロ「心配するな・・・シエル・・・俺はお前を・・・お前を信じている・・・」

シエル「・・・ゼロ・・・」

ゼロは昔と違いとびっきりの笑顔を見せてくれた・・・昔と違って表情豊かになったものだ・・・

ゼロ「どうした？シエル。」

シエル「・・・えっ、いや、な、なんでもないの。」

ゼロ「・・・？」

危ない危ない・・・こういうところは変わってないんだから・・・

シャリテ「はいはい。ラブコメディはいいからさ、早く説明して？」

シエル「ちょっ！？シャリテ！？」

シャリテ、博愛という意味。シエルが名づけた。今までのサイバーエルフは1度使うと死んでしまったがこのサイバーエルフはシステマ・シエルを応用して作ったもので使用しても死なない。シャリテの能力の1つとして、ゼロの反応速度、攻撃力、防御力などをアップさせる事ができ、エネルギー水晶、ライフエネルギーを供給することができるのだ。

たまにこういう発言もするが・・・

ゼロ「・・・それで・・・どうする？」

シエル「ええ。いまからゼロにはミッションに行ってもらわ・・・

・まず最初にあなたと私が出会った場所の研究所に行ってもらいたい……」

ゼロ「研究所？ どうしてだ？」

シエル「最近の研究で分かったのだけど、おそらくあの研究所にはあなたの武器とあなた自身の性能をアップさせるプログラムがあるようなの……」

ゼロ「なるほど……ラグナロクの残骸を探す前にそれを使ってアップロードしようということか……」

シエル「ええ。そういうこと……」

ゼロ「……体を弄くりまわされるのは好きではないんだが……」

こういうところも変わっていない……ゼロはどうしてもいうときだけ、メンテナンスを受けてきたのだから。

シエル「いいから、早速転送するわ……」

ゼロ「分かった。」

シエル「オペレーター。お願い。」

オペレーター「了解。転送まで、3、2……」

シエル「ゼロ……気をつけて……」



ゼロ「ああ。」

オペレーター「1・・・転送!!」

ネオアルカディア跡地・・・

???????「ゼロが目覚めた・・・」

・・・  
緑色にの小さな球体・・・いや・・・サイバーエルフが喋った・

???????「そう・・・」

???????「しかたねえだろう？俺たちは今サイバーエルフな  
んだから・・・」

???????「そういうことだ・・・我々は見守る事しか出来ない・  
・・・」

???????「ゼロ・・・どうか無事で・・・」

・ 上から水色、オレンジ 紫、青のサイバーエルフが各々告げた・

ここから始まる。本当の戦い・・・

## 第2章 始動

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8047x/>

---

ロックマンゼロ 紅き英雄の未来

2011年10月31日03時11分発行